彙　報

京都大学文学部西アジア南アジア史学講義題目（昭和40年度）

研究	教授	岩村　忍	遊牧民族史
〃	助教授	藤枝　晃	敦煌と西域
〃	講師	伊藤義教	Veda 語から Avestā Gāthā 語へ
〃	助教授	本岡　武	東南アジアの人文地理学的諸問題
〃	講師	藤本勝次	イスラム時代の西アジア史
〃	〃	中村孝志	東南アジア史研究
〃	〃	恵谷俊之	モゴール王朝史の研究
〃	〃	吉川　守	シュメール語の動詞組織の研究
研究	講師	藤縄謙三	ギリシア神話の歴史的背景
〃	〃	岩本　裕	東南アジアにおけるヒンドゥ教
演習	〃	伊藤義教	(B) Gu̯astak Abāliš
〃	〃	城崎　進	古典ヘブライ語文法及び申命記法典講読
講読	〃	加藤一朗	ヒエログリフ講読
語学	助教授	大地原豊	梵語文法
〃	講師	加賀谷寛	近世インド語
〃	〃	井本英一	近世イラン語
〃	〃	田中四郎	アラビア語（初級）
〃	〃	〃	〃　（上級）

本会会報ほか

○**本会例会**（1965年度）——**第1回**（総会）：3月29日午後1時，於京大文学部第1講義室，吉田光邦氏「西アジアの調査談」（スライド映写）。本総会ではこのほか，前年度の会務報告，会則の変更並びに65年度の計画についての報告が行われた。足利会長には引きつづき2年間会長職をお願いすることとなり，織田副会長以下もこれまでと同一の陣容。但しこれまでは顧問の一部が編集を担当していたが，これからは顧問は廃止されて「編集委員若干名」が新しく設定され，名実共に編集部が出来上がった。新会則はつぎの通り。

西南アジア研究会会則

第1条　本会は西南アジア研究会と称する。／第2条　本会の事務所は京都大学内におく。／第3条　本会は西南アジアに関する人文科学自然科学各部門における研究と知識の普及を目的とする。／第4条　本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。(1)会誌「西南アジア研究」の発行　(2)研究会および講演会の開催　(3)その他本会の目的を達成するために必要な事業／第5条本会の趣旨に賛同し所定の会費を納入する者を会員とする。／第6条　会員を次の4種に分つ(1)賛助会員　年額1万円（1口）以上を醵出するもの　(2)維持会員　年額2千円を納入するもの(3)一般会員　年額1千円を納入するもの　(4)学生会員　年額700円を納入するもの／第7条　会員は会誌の配布を受け，会の事業に参加することができる。／第8条　本会に次の役員をおく。会長1名，副会長1名，編集委員若干名，幹事若干名／第9条　会長副会長は総会で選出する。／第10条　編集委員，幹事は会長がこれを委嘱し，会務を担当する。／第11条　役員の任期はいずれも2年とする。／第12条　会長は毎年1回以上総会を招集し，会務を報告する。／第13条本会の会計は会費その他による。／第14条　本会の会計年度は毎年4月1日に始まり，翌年3月31日に終る。／第15条　会則の変更は総会の議決による。——上記による役員は会長足利惇氏，

副会長織田武雄，編集委員羽田明（長），吉田光邦，加藤一朗，伊藤義教，幹事恵谷俊之，小野山節，山本茂。　**第2回**：6月26日午後2時，於京大文学部第1講義室，萩原淳平氏「コルドバ，イスタンブール，カイロ，カルカッタの旅」(スライド映写)（日本オリエント学会関西部会と共催)。

○**京大印度・仏教学会**の「**インド学試論集**」Nos. 6—7は3月末発行。足利惇氏・善波周両博士頌寿記念号で，京大文学部梵語学梵文学・印度哲学史・仏教学各教室にゆかりある諸氏の論攷が多数登載され陸離たる光彩を放つ。　○**京大東南アジア研究センター**の「**東南アジア研究**」第2巻第4号は3月末発行された。第3巻第1号は6月末発行の予定。同センターの国際シンポジウムは「東南アジアにおける日本の未来」をテーマに5月31日～6月2日にわたり比叡山ホテルで開催された。

○**日本オリエント学会**の季刊「**オリエント**」Vol. Ⅶ, Nos. 3–4は5月20日発行，宮崎市定，吉川守，小川英雄，加賀谷寛，井本英一ほか諸氏の論文等登載。同会と朝日新聞社との共催になる「パレスチナ発掘展」は5月25日～30日東京都日本橋三越7階新ギャラリーで開催された。

会　員　消　息

○**藪内清**氏（京大人文科研教授）訳「数の話」は昨年10月発行（ライフ社)。　○**吉田光邦**氏（京大人文科研助教授）訳「機械の話」(『ライフ』編集部編）は昨年12月1日発行（座右宝刊行会)。○**吉田光邦・西田竜雄・水野清一・桑山正進**（1月10月)・**小谷仲男**（1月20日)・**樋口隆康・末尾至行・応地利明・藤吉慈海・大地原豊・平島成望・日比野丈夫**の諸氏（本誌前号参照）はそれぞれ予定の期日またはそれと前後し帰国された。　○**藤本勝次**氏（関西大学文学部教授）は1月11日発「マラヤ・インドネシアにおけるイスラム教の研究」のためタイ・マレーシアへ出張，3月30日帰国された。同氏と**清水誠**氏との共訳になる「イブン・ハルドゥーンの『歴史序説』下巻」は3月30日発行（アジア経済研究所——本書については本誌 No. 12, p. 54 参照)。　○**宮崎市定**氏（京大文学部教授）の最終講義は「論語と孔子の立場」と題し1月30日京大法経第2教室で行われた。午後1時15分前川貞次郎教授の司会につづいて井上智勇文学部長が宮崎教授の略歴紹介をかねて挨拶，佐伯富教授による学問業績の紹介のあと，1時35分宮崎教授の講義が開始された。満場に哄笑を誘うユーモアを交えながら淡々とすすめられ，堂を埋める聴衆に深い共感を呼んだ。2時51分小葉田淳教授閉会の辞をのべて3時散会となったが，**講義の要旨**（京大文学部東洋史研究室間野英二氏による）は次の通り。

本年度の講読のテキストに「論語」を用いたので，今回も「論語」をとりあげることにした。「論語」は誰が読んでもよい書物であるが，特に中国を研究する人は必ず読むべきものだと思う。「論語」についての研究書，注釈書は，これまでにしばしば出されているから，新たにこれをとりあげる以上は，なるべくこれまでとはちがった読み方をしてみる必要がある。

一体，「論語」の読み方には，大別して漢学と宋学の二つの流れがあるが，清朝時代の考証学者達は，「古を去ること未だ遠からず」という理由から漢学を尊重した。しかし漢学の生れた時代

（主に後漢の時代）と，「古（いにしえ）」すなわち孔子の時代との間には，おおよそ500年の隔たりがあって，はたして後漢の時代の「論語」の読み方と，孔子の時代のそれとが同じであったかは，疑問としなければならない。

それでは，今日の我々に，孔子の時代の読み方が可能であろうか。それは，やり方によっては不可能ではない。すなわち，漢学等といった「論語」の注釈をいったん離れて，「論語」の本文そのものを改めて考えなおしてみることにより，それは可能になると思われる。

そこで，「論語」のなかの3章をとりあげてもう一度その意味を玩味してみることにしたい。

(1)「祭如在祭神如神在子曰吾不与祭如不祭」

この章は普通には，「祭如在。祭神如神在。子曰。吾不与祭。如不祭。」（祭ること在（おわ）すが如し。神を祭ること神在すが如し。子曰く，吾祭に与（あずか）らざれば，祭らざるが如し。）と読まれているようである。「子曰」の前の「祭如在祭神如神在」という八字は，孔子の時代に伝えられていた古典の引用であるが，上の読み方に従うと「祭神如神在」は「祭如在」を説明しなおしたことになる。しかし，古典を引用する場合，これは少しおかしい。私はこれを「祭如在祭。神如神在。子曰。吾不与。祭如不祭。」（祭るには祭に在るが如くす。神は神在（いま）すが如し。子曰く，吾与らず。祭るも祭らざるが如し。）と四字句に切って読むべきだと思う。こう読んでも格別大したちがいはないように見えるかも知れないが，実はこう読むことによって，はじめて孔子の古典に対する態度を理解できるのである。上の下線をほどこした部分を比較してみれば，孔子が古典の文句を自主的な立場で利用しようとしたこと，またある場合には古典の文句をもじってもかまわないと考えていたことを知りえよう。こういう例は「論語」の各所に見出し得るが，その一例として

「不忮不求。何以不臧。子路終身誦之。子曰。是道也。何足以臧。」（忮（さから）はず，求めず。何を以てか臧（よ）からざらん。子路終身これを誦す。子曰く，この道や，何ぞ以て臧（よ）しとするに足らん。）

なる一章をあげることができる。この一章の「不忮不求。何以不藏。」という八字は，やはり当時に伝えられていた古典の文句であるが，下線の部分を比較してみればわかるように，孔子は，古典の文句をもじって，自己の新しい思想を表現しているのである。

それでは，何故このように読まれずに，ことさら難しい読み方がされるようになったかというと，孔子が，時と共に人間から聖人へと偶像化され，また儒教が国教の如きものになると，聖人が古典をもじって用いたり，或いはゴロ合せの如きことをしては具合が悪いということになり，さらにまた論語が太学等の試験問題に用いられるようになると，あまり簡単に読めては問題にもならないので，受験生の参考書を書いた学者達によって，ことさら難しい読み方が行われるようになったのだろうと思う。

これは，「論語」の読み方に後から作為が加えられ，その結果孔子の人間像も，実際とは異なったものになってきた一つの例である。

やはり歴史家の仕事は，側近者達のつくり上げた人間像を改めて検討しなおして，その本来の姿を明確にすることであろうと思う。

(2)「子曰。学而時習之。不亦説乎。有朋自遠方来。不亦楽乎。人不知不慍。不亦君子乎。」

これは，誰でもよく知っている一章であるが，従来の解釈でちょっとひっかかる所があるのでとり上げることにする。

「人知らずして慍(いきどほ)らず，亦君子ならずや」の「人知らず」の意味について，“これを「世間の人が自分を理解してくれなくても」と解するのは，卑しい人の解釈で，孔子は何も人に認められなくても一向に意に介さなかった。この部分は「弟子達が，いくら学問を教えてもなかなか覚えてくれなくても，それに腹を立てず，しんぼう強くやるべきだ」と解釈すべきである”とする説がある。しかし，当時の孔子の立場を考えるならば，やはり「世間の人が……」と解釈すべきだと思う。孔子の生れた魯の国は文明の古い国であった。従って，孔子のとく思想は，魯の国の多くの古い因習を批判することになり，孔子はいろいろと悪口をいわれたに相違ない。これは，すべての改革者のもつ運命であろう。そう解釈して，はじめて「有朋自遠方来。不亦楽乎」の「遠方」の意味が明瞭に理解できると思う。しかし，孔子の思想が魯の国にあわなかったわけではないことは，後の歴史が証明するとおりで，ただその思想が当時としては進み過ぎていたのである。尚お，「君子」という言葉は，努力すれば到達できる境地を指す。従って，「君子」という言葉の出る所には，孔子の願望を見出すことができる。この部分も，「世間の人が理解してくれなくとも腹をたてたりしない，そういう人になりたいものだ」の意に解釈すべきだと思う。ここにも，当時の孔子のおかれていた立場がよく表わされていると思う。

(3)「子曰。吾十有五而志学。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而従心所欲不踰矩。」

これも非常に有名な一章であるが，「三十而立」とは，「三十で学問の地がためができた」の意味。「四十而不惑」とは，「論語」の他の個所に，「智者不惑」といい，また「墨子」に「恕明也」とあるのを参照して，「四十で心が明らかになった，心が鏡のように何でも写しとって物の本当の姿がつかめるようになった，勉強の効果があらわれた」の意味に解される。なお，「墨子」の「恕」という文字は字書にも見えぬ文字であるが，これは「知」と「心」の二字を重ねたもので，「知心明也」（知は心明らかなる也）と読めばよい。「五十而知天命」の「天命」とは，「何か知らない不思議な力，説明できない大きな力」の意で，孟子の「天命」とも，また宿命とも異なったものだと思う。「六十而耳順」とは，「六十で何を聞いても腹が立たなくなった」の意。「七十而従心所欲不踰矩」は，従来の解釈では，ここに至って孔子は本当の聖人の境地に達し，行動の自由を獲得したと理解されているが，私は同時に孔子が「子曰。甚矣吾衰也。久矣吾不復夢見周公。」という如き状態にあった時の心境を述べたものだと思う。すなわち，孔子は七十の頃になると，自分の体力・気力の衰えをつくづくと自覚していたに相違ない。

こう解釈して来ると，四十迄はともかくとしても，五十以後は孔子も全く普通の人と変らない平凡な人間に見えるかも知れぬ。

しかし，孔子の常人と異なっていた点は，孔子が老人としての自覚を，はっきりと持っていたこ

とであろうと思う。孔子は「論語」の他の個所で「四十五十而無聞焉。斯亦不足畏也已。」(四十五十にして聞こゆる無きものは，斯れ亦た畏るるに足らざるなり）といい，また「老而不死。是為賊。」(老いて死せざるは，これを賊となす）といっているように，教育者としてのおそろしい迄のきびしさを持った人であり，またこのきびしさが孔子の身上であった。

孔子は，時にはだじゃれやゴロ合せの如きことをしたりする余裕をもった人であったが，その反面に厳しい心を持ち，むしろ愛憎の強かった人ではないかと思う。孔子の時代の原始儒教は，一方においては，きわめて戦闘的な新興宗教であり，そうであったが故に，当時の青年の心をつかみ得たのだと思う。それが，だんだん時代と共に，まるいことばかりを主とするような儒教へと変質して行ったことに注意しなければならない。

私は，諸氏が，「論語」をあらためて自分の眼で読みなおして，原始儒教の姿と孔子の人間像を考えなおしてみてくれることを希望する。御多忙中を参会くださった皆様に厚く感謝申し上げる。

このあと，同日午後6時～8時，宮崎教授送別会が京都私学会館で催された。参会者約150名，佐藤長助教授の司会で進められたが，まず田村実造教授の開会の辞があり，ついで中原与茂九郎立命館大教授，井上智勇文学部長，吉川幸次郎教授，森鹿三京大人文科研所長，柴田実教養部長，桑原武夫教授，高田三郎教授，有光教一教授，外山軍治大阪外大教授，村上嘉実関学教授，間野潛竜富山大助教授，恵谷俊之講師，砺波護氏（東洋史大学院），岡本泰子氏（東洋史学部）の諸氏から祝辞や懐古談がのべられ，最後に佐伯富教授が閉会の辞をのべて会を終了。なお，桑原教授の祝辞のあと宮崎教授のあいさつがあった。——教授の御停年退官に関する行事はこうして1月に終ったが，越えて3月末教授は京大を停年退官され，4月2日付をもって京都大学名誉教授の称号を授与された。　○**内田紀彦**氏（大阪外国語大学助手）は久しくカルカッタ大学に留学中だったが，本年1月西独ハイデルベルクに転じ Südasien Institut において3ケ年の予定で Prof. H. Berger の許で研究をつづけられることになった。　○**大野盛雄**氏（東大東洋文化研究所講師）はアジア経済研究所海外派遣員としてイラン農村の社会経済構造研究調査のため2ケ年間イランに滞在，2月21日帰国された。○**岩村忍**氏（京大人文科研教授・京大東南アジア研究センター所長）は HRAF 年次会議とアジア学会の年次会議に出席のため3月1日渡米，4月6日帰国された。同氏と**勝藤猛**氏（大阪外国語大学講師）との共著「大蒙古帝国」は1月10日発行された（人物往来社）。○**大畠清**氏（東大文学部教授）は3月末停年退官，4月2日付で東京大学名誉教授の称号を授与された。○**足利惇氏**氏（京大文学部教授・本会会長）は3月末停年退官，4月2日付京都大学名誉教授の称号を授与された外，4月から東海大学文学部長として東京都杉並区上荻4丁目14の46に御在住。その御退官記念パーティは5月9日午後2時半～4時半，京都ホテルで学内学外の有志133氏の参加をえて盛大に挙行された。学界の長老巨峰林立される中を善波周講師の司会によって進められ，長尾雅人教授が足利教授退官記念事業会の経過報告をかねて賀意を披露，門下生代表大地原助教授，京大印度・仏教学会会長長尾教授，西南アジア研究会副会長織田教授の挨拶につづき，各部門から

それぞれ記念品料，「インド学試論集（足利博士頌寿記念特集号）」，「西南アジア研究（足利教授退官記念特集号）」の贈呈が行われた。このあと足利先生の謝辞と挨拶があり，田中秀央先生の発唱による乾盃を機に宴は華やかにすすみ，羽渓了諦・山口益・宮崎市定・松前重義（東海大学総長）・菅泰男・吉川幸次郎・井島勉・森鹿三・西谷啓治諸先生のスピーチに哄笑を交えながらなごやかに終了，4時20分退場される足利先生夫妻を満場の拍手で送った。なお，足利先生はその退官記念事業会から贈られた記念品料から，西南アジア研究会へ 25 万円，京大印度・仏教学会へ 12 万円を寄付された。　○**吉川守**氏（神戸外国語大学講師）は4月1日付で広島大学文学部助教授（言語学）として転出された。　○**岩本裕**氏（京大文学部講師）の「サンスクリット文法綱要」は4月8日発行（山喜房仏書林）。　○**田村実造**氏（京大文学部教授）は「欧州各国における東洋史学研究の現状調査およびボン大学において東洋史学の講義のため」4月27日伊丹空港発渡欧，西独・仏・オーストリアを経て9月25日帰国される予定。　○**小野山節**氏（京大文学部助手・本会幹事）の「アンドレ・パロ著『シュメール』」（青柳瑞穂氏と共訳）は5月15日発行された（『人類の美術』第1巻――新潮社）。　○本特集号の上梓を賛助して，次の諸氏からそれぞれ付記の金額が寄託された：**岡崎敬**氏（1万円），**佐藤圭四郎**氏（3千円），**中原与茂九郎**氏（3千円）。